第六章 外交の「現実」と「幻想」

共和国暦七月二五日、前日にドライバオム宇宙要塞が受信したメッセージを受けて開かれた閣議は、最初から波乱含みだった。連邦空軍がヘルムに設置した大出力の超空間波通信装置によって、連邦大統領リー・タウナーからのメッセージがドライバオム要塞に到達したのである。

「連邦は、ル・ラント共和国を銀河の隣人として歓迎する。『シュネーゼル事変』は、双方にとってきわめて遺憾なできごとであった。事変で失われた人命を償う道として、連邦は、ル・ラント共和国政府と市民に対して、まず二つの提案をしたい」

「タウナーは告げる。一つは、『シュネーゼル事変』の後始末のための外交交渉の開始。もうひとつは、正式な外交樹立のための外交使節団の交換。」

「……連邦政府は、既に共和国へ派遣するグループの人選をはじめ、首脳的な判断を願うものである」

「フェレラ共和国首相を筆頭に、ドロク参謀総長、ブラウエン国防相、ロヴェル軍需相、ワイアトゥール・ブ蔵相、シユジュケイ植民相。加えるに経済相、情報通信相、資源エネルギー相、法務相、国務相、地域開発相、運輸相の二三名が、閣議に名をつらねている。」

「最初に、わたしの意見を申し上げる。シエルメス連邦大統領の提案を容れようと考えます」

共和国首相ピセンテ・フェレラは、タウナーの提案受諾の意向を示した。

「承服しかねますな。そもそも連邦とは何か……彼らは、我々が発見した惑星コーウィンに、勝手に『シュネーゼル』などという名を付け、連邦によるコーウィン侵略事件を、こともあろうに『シュネーゼル事変』などと呼んでいるのです。彼らの領土に対する野心は隠せるものではありません」

当然のようにドロク参謀総長が反対を示した。

「その通り。シエルメスには、最初に強力な一撃を加えておくべきだ。一撃を与え、断固たる態度を示さねば、シエルメスは共和国を侮ってかかってくるだろう」

「宇宙の大義が我らにあることを知らしめるためにも、コーウインの報復は必須だ。最初から交渉に応じるような軟弱な構えで、宇宙の大義を全うできるとも思っているのか。首相は、聖戦を自ら戦いぬいたわけではないから実感できないのだろうが」

「口々に反論してくるブラウエン国防相やロヴェル軍需相の、反論の内容の貧しさに、フェレラはため息をつく思いである。」

「財政面だけでも、『ドレド戦役』の戦費の償還さえ、あと一五年はかかる見込みです……」

「フェレラも反論する。『聖戦目的』と『宇宙の大義』を振りかざす閣議の他のメンバには効果がないことを知ってはいるが。」

「この上、シエルメスとの戦争となれば、共和国の財政は確実に破綻するでしょう」

「大義のためには国家の財政など何程の意味もない」

「昂然と言い切るブラウエンに、フェレラは苦笑を禁じえない。共和国の財政が破綻し、経済が破壊されても、ブラウエンに結びついた軍需産業はさして痛痒を感じない。『宇宙の大義を守る聖なる戦士』なる幻想に取り憑かれているブラウエンに、経済を説

いてみても始まらないのも確かだ。だからこそ、ブラウエンは、軍需産業の忠実なマリオネットとなりえるのだが。

「蔵相？」

フェレラから視線を向けられて、ワイアトゥループ蔵相は額の汗を拭う。

「それは、その、確かに財政的に、シエルメスとの戦争は……」

「蔵相！」

びくつと首を竦めたワイアトゥループが視線を転じた先に、ドロク元帥の威厳に満ちた姿がある。

「い、いえ、その、まあ、紙幣を増刷することで、まあ……あとは、増税、です。祖国防衛と宇宙の大義のための聖戦のため、とあれば、市民から苦情はでますまいし」

「経済相、きみの意見は？」

「はあ、参謀総長と国防相のご意見はもっともである、と」

フェレラの視線を前に他の閣僚は、沈黙の帳を上げようともしなかった。フェレラを支持する者は皆無の状態だった。

「なるほど、皆さんの意見は分かりました。決定は後で伝えます。今日はこれで散会としましょう」

頷き、フェレラは唐突な調子で宣言する。

返ってきた視線は、啞然、呆然、混乱……咳払いし、ロヴェル軍需相が反問する。

「散会？ まだ、三〇分も経っていませんぞ」

「意見の出ない会議など、一日がかりでやっていても何の実も上げられません。参謀総長と国防相の他は、意見もないようですし、実のない会議に漫然と出席してられるほど、皆さんも暇ではないはずですから」

「不得要領と不承不承が二人三脚しながら退出を始める閣僚の背に、さして急いでもないフェレラの声がかけられる。

堂々たる偉丈夫が不審げに眉を顰めて振り返った。

「総長、ちよつと伺いたいことがある。残って頂けるとありがたい」

「なにごとですか？ 仰せのようにならぬ小官も決して暇ではありませんぞ」

「暇はとらせません。これをご覧になって頂きたい」

手渡されたハード・コピーに走らせたドロクの視線が一気に陰しくなる。

「これは！」

「昨年五月の、ベクトフ艦隊によるドレド空襲作戦実施に関する戦闘詳報です」

「首相閣下。確かに、共和国首相は、宇宙軍における最高責任者として、すべての完全な戦闘、交信、および訓令に関する記録を閲覧する権限を有している」

「しかし、一〇年ほど前から閲覧には参謀総長と参謀次長の同意と、閲覧時の同席がなくてはならない」

「見る見る激怒に表情を取って代わらせ始めるドロクを、フェレラの視線は無視した。

「法律上の規定ではなく、単なる不文律……ですらなく、何となく始まった慣習です。違いますか？」

「これらの記録は軍機ではないが、それに準じるものだ。文官が任意に閲覧を許されていいものではない」

「……というのが参謀本部の言い分ですが、実際には何の法的な裏付けもありませんし、歴代の政府主席がそのような特権を参謀本部に認めたと公式の記録もないのですよ。ここ数日、徹夜で調べましたから、少々睡眠時間が不足だ」

「首相！」

「参謀本部は、あれが前線指揮官の独断によるものだ、と主張し

ていまずね」

物柔らかだが、断固とした口調が、ドロクを青ざめさせた。

「……だが、ベクトフ少将は、明らかにドロク参謀総長からの命令を受け取っているし、その命令をたてに、マールク提督からの中止命令をも拒絶している」

「それは……」

「これらの記録を公開し、ベクトフ少将ばかりでなく、参謀本部の責任を問うてもよい、とわたしは思っています」

「……そんなことが、できるとでも？」

「できます。知らないかね、参謀総長。ドレドに家族を持つていた共和国市民は意外に多いのだよ」

「市民など……」

「何の力もない……と馬鹿にしてはいけません。共和国は、まだ軍事独裁国家にはなっていない。参謀本部がパワフルな組織であることを認めます。しかし、宇宙の大義に基づく絶対的な権限が、あなたに与えられているわけではないのですよ、ドロク参謀総長……」

「首相閣下は、大義を愚弄されるか！」

「その点に関する議論は後日に回そう」

頭頂の薄くなった首相は、さりげなくドロクの激昂をいなした。「不本意ではありますが、この件をしばらく置いてもいい。それとも、世論の圧力というものを少し味わってみたい、とでも？」

強かにやり込められて参謀本部に戻ったドロクは、「最高戦略会議」を召集する。彼の最も信頼する肥満禿頭の参謀大将は、無表情に応答した。

「よろしいではありませんか。ここは、フェレラ首相に花を持た

せることにしても。シエルメスのコーウィン侵略に対して、賠償を求める交渉を開始した、ということにしておけば宜しいのではありませんか」

「……」

「失敗し、フェレラ首相が屈辱的な和平条件でも押しつけられれば、その時が反撃に転ずるチャンスでしょう。いずれにしてもマス・ジャーナリズムを介した情報操作技術では、共和国政府も我々の敵ではありません」

ワシエックは、彼の才能を否定的に評価する立場と肯定的に捉える立場の人間から、それぞれどぶさらいの名人、あるいは情報操作の達人と呼ばれている。彼の見るところでは、マス・ジャーナリズムの唱える“報道の公正”などは存在しなかった。

「彼らは、情報を売買することで利益を得ています。崇高な宇宙の大義に共鳴しない連中も、十分な利益を提示すれば懐柔できます。利益を欲しない人間には、改めて大義を説けば宜しいことですし、そのいずれも通用しない人間は、巨大な組織でメジャーではあり得ません。無視してもさしつかえないのです」

「そうかも知れない……しかし、我々はあの男を見損なっていたかもしれないぞ、ワシエック。奴は、不可侵のタブーに次々に手を出してきている。共和国のためにきわめて危険だ」

首相に対する敬意を、ドロクはもはや形式だけでも示そうとはしなくなっていた。「禿豚」とあだ名される参謀本部次長は、脂っぽい微笑を浮かべながら言い放った。

「何人もピセンテ・フェレラがいるわけではありません。たった一人ですから。どれほど頑迷に大義を否定する人間も、まさに人間であるという弱点を持つておるのですから」

翌日の閣議で、ドロクはフェレラへの支持を表明する。驚くブラウエンやロヴェルに、偉丈夫の元帥は、昂然と応えた。

「シエルメスにも機会を与える。それこそが、宇宙の大義の王道
を行くものの採るべき態度と、小官は信ずるものであります」

ドロクに代表される参謀本部の譲歩が、他の強硬派の閣僚の判
断をも左右した。彼らは、最強硬派と思われたドロクの豹変に驚
き、フェレラからの提案に、棄権という形で逃避するしかなかつ
た。フェレラは、首相権限でシエルメス連邦との外交交渉開始を
決定した。

フェレラ首相が、アリシアの仲介でマールクと密かな会談を
持ったのは、その数日後のことである。彼は、アリシアからの求
めに応じて、高速の軽巡洋艦で母星へ戻ってきていたのである。

「……ということだ」
冒頭、フェレラは閣議の内容をそのままマールクに伝える。

「彼らは戦争がしたいようです。ドロドとの戦いくに勝ったおかげで、
どんなことでもできると思いこむくらいに思い上がっているとい
っていいでしょう」

めずらしく髪をきちんと整えてきていたマールクだったが、途
端に右手を頭に持っていった。ル・ラント最高の軍事的天才は、
濃い灰色の瞳をフェレラに据えて反問した。

「……それで、勝てるおつもりですか、首相閣下？」

「勝てるかね、軍事的に？」

「分かりません」

マールクの応えは率直だった。

「そんなことが分かるわけではないのです。わたしはシエルメスを
知りません。ヒューの艦隊を叩いたシエルメスの艦隊は三〇〇〇
から四〇〇〇隻だったそうです。たぶん、一個制式艦隊でしょう。

しかし、これが何個あるのか、更に何個艦隊を建造し、維持でき
るだけの国力を彼らが持っているのか……わたしたちは何も知り
ません。それより、首相閣下」

「なんですか？」

「何のためにシエルメスと戦争しなければならいんですか？」

「……」

「シユネーゼルを取るためですか？」

「それはあるな。正直に言っ、わたしはコーウィン……シユネー
ゼルが欲しい。母星もドロドも放射能で手酷く汚染されてしまっ
た。毎年、膨大な数の放射線障害の患者が生まれている。無論、
共和国政府は、彼らと戦争による放射能汚染とは全く無関係との
立場を取り続けているがね」

「それは、また……」

「因果関係は証明できないからね」

フェレラはほろ苦く笑う。

「いったん、政府の補償責任を認めてみたまえ。彼らへの補償金
だけで、共和国の財政は破滅するでしょう」

「……それで、なんのためにシエルメスとの戦争を？」

「シユネーゼルを取るためだ。それ以外に理由がありえるかね」

「では、戦争はする必要ないでしょう」

マールクは言い切った。交渉すればいい。シユネーゼルを買い
取ればよいのだ。連邦は、数年にわたってシユネーゼルを未入植
のまま放置してきた。彼らが、フロンティアの不足を来していな
い事実を、それは示している。十分な代価を示せば、連邦はシユ
ネーゼルを共和国に売るだろう。

「しかし、どうやって代金を返却するのかね？」

「そんなことは政治家の考えることです」

マールクは幾分素っ気ない。

「わたしは経済学部出身じゃありませんよ。まあ、極端な場合、彼らの求めに応じて軍事協力を申し出てもいい。連中も、我々同様に宇宙海賊に悩まされているとすれば、ね。シユネーゼルを得て、財政が健全化すれば、ちょっとは苦しいでしょうけれど、やれないことはない」

「なるほど……」

「マルクは言う。軍事力は目的ではない。目的を達するための手段でしかない。それも、最悪の手段である。この時、マルクがフェレラに説いた内容は、彼が優れた戦略家であったことを雄弁に示している。

「つまり、連邦が交渉にのつてこなかった場合……極めて危険ですが、シユネーゼルの巡つての限定的な軍事作戦を起こすという手段も考えられないではない。連邦の軍事力を一時的に叩き、シユネーゼル割譲のための外交的な環境をセットアップするのに、艦隊兵力を動員する。シユネーゼルの得たら、ただちに連邦とは和解する。ですが、これは危険すぎます。シエルメスが局地戦で敗れたからといって、あっさりと交渉のテーブルについてくれるとはとても思えない」

「なるほど……では、この場合の共和国宇宙軍の存在意義は？」

「防禦戦力です」

「弾き返すような応答は、マルクにしては極く珍しいものだった。

「万一にもシエルメス連邦が“報復”を唱えて攻撃に出てきた場合、共和国圏、ひいては市民を保護するための防禦戦力です」

「きみの見識はよくわかりました、マルク提督。わたしは、シエルメスと外交のテーブルについてみるつもりです」

「……」

「参謀本部や軍需産業の複合体との全面対決も、今回は敢えて辞

さない覚悟でやるしかない。ミュッケル議員や、元帥からみれば、わたしだとて完全に清廉潔白な身の上ではない。これまでは、長いものには積極的に巻かれてきたし、それなりにおこぼれを頂いても来ました」

「率直なほどの調子で語る首相を、マルクは呆気に取られて凝視する。実のところ、彼は畏ではないか、と疑っていたのだ。母星での休暇を終えたばかりのメル・ヤンデキフィテイが、アリシアからの親書を持ち帰った。第一艦隊を艦隊演習に出したマルクは、演習を統轄すると宣言しておいて、高速の巡洋艦で母星へアリシアを訪ねたのだ。

「ピセンテ・フェレラ首相が直接の会談を求めている、ただし、畏である可能性もある……アリシアは言った。そこまでするとは考えにくい、マルクを秘密裏に呼び寄せ、謀殺する……参謀本部であれば、考えないこともないだろう。

「畏ではないようですね、首相閣下」

「畏……？ 手間をかけてこんな芝居を打つくらいなら、きみが提出した辞表を受理していたよ。艦隊あつてのマルク元帥だからね。

「術策と言えば、多少の術策を弄することになるでしょう。無理をすることになると思います」

「術策……ですか？」

「そう。参謀本部にしても、彼らをバックアップしている軍産複合体にしても、戦役の間、余りに強大になり過ぎた。彼らの力を削ぎ、無謀な戦争への暴走に歯止めをかけられるとすれば、今しかなさそうです。シエルメスと交渉の席につくのは、その第一歩。うまくいけば、シエルメスをわたしの味方につけることも可能でしょう。第二の味方として……」

「第二の？」

怪訝そつなマールクに、フェレラは微笑つて続けた。

「元帥、きみを第一の味方だと思いたいのです。共和国政府そのものは、もう余り寿命が残っていないような気がしないでもありません。しかし、共和国は、市民がいるかぎり生き延びるものですからね」

連邦の反応は速かった。

タウナー大統領は、“シュネーゼル事変”後、ただちにフェルトリック・キヤスパーを首班とする連邦外務委員会を設置した。タウナーの友人であり、有力な弁護士でもあったキヤスパーは、一人からなる正式委員と一三〇名以上のスタッフを集め、自らユアロフレスタの連邦空軍泊地に向いて、ル・ラント政府からの回答を待ち受けていた。このときのスタッフの中に、事変でも第三艦隊に随行していた連邦総合大学の研究生、テリー・リヴァーイズも加わっている。

テリー・テラサキ・リヴァーイズはこの時二六歳。連邦総合大学で古言語学を先行する博士課程の学生である。“シュネーゼル事変”でも示されたとおり、言語の骨格とも言うべき言語要素と基本文法の解説に天才的な才能を示した。連邦公用語の起源解明に興味を示した彼は、事変の直前に、連邦公用語の母体となったメルティアのドルス地方の古い言語を解明し、発表している。連邦空軍が、彼を第三艦隊に随行させ、キヤスパーがスタッフに望んだのもゆえのないことではなかった。ただし、本人は、やり残している『古ドルス語』の研究が中断を強いられることを、さして歓迎していない。

ピセンテ・フェレラからの提案受諾の回答を得ると、リヴァーイズを含む外交使節団約三〇〇名が、ユアロフレスタ泊地を発った。

連邦空軍第四艦隊の護衛を受けて“ル・ラント回廊宙域”に入る。ドライバオムから一〇〇光年のポイントで、連邦空軍艦艇は五〇隻の駆逐艦を除いて引き返し、護衛をヤンデキフィティ艦隊に委ねた。一行は、ドライバオムの要塞に寄港することなく、“ドライバオム回廊宙域”を経て、共和国母星へ到着する。

シエルメス連邦政府とル・ラント共和国政府の交渉が正式に開始されたのは、連邦暦の五六八年三月一日、共和国暦では一七七年の八月一〇日。“シュネーゼル事変”後、共和国暦にして約三ヵ月後のことである。

同時に、連邦空軍も活発な動きを開始する。まず、連邦空軍参謀本部内に“対ル・ラント部局”として作戦第四部局が設置され、五〇〇人に上るスタッフが集められ……これは後に二〇〇〇名に拡大されたが……、対ル・ラント戦の研究に当たることになった。

艦政本部づきの天才造船技術者ウラディミール・レムジイ・カトウーは、それまでの常識を覆す一四〇〇シエルメス・ヤード級巨大戦艦のブルー・プリントを提出したのも、大規模な艦隊戦闘の発生を予見してのことだった。数千単位の制式艦隊の情報センタとしての機能を備えた、この『シグナ・フォース』級戦艦は、第一期分として九隻の建造が許可されるに至る。

第一艦隊と第二艦隊が、“対ル・ラント戦主力部隊”との位置付けを受け、それまで第一艦隊の旗艦だった『コーネット』号は、超大型巡航戦艦『シグナ・レート』級の二番艦に、連邦空軍艦隊旗艦の名前を譲り渡した。“シュネーゼル事変”で武勲を上げたレーフラム・トゥリユー・ネレイドは、第二艦隊作戦先任参謀としてヒューロザイオン要塞から転出する。

更に、連邦議会は、『第一次建艦補充計画』第一期分の建造艦艇数を四万隻から一挙に六万隻に拡大する法案を可決した。連邦空軍艦隊は、第一期分の艦艇が全て竣工する五七二年までに九個正

式艦隊と四〇個辺境警備艦隊が編成されることになり、兵員の増強・養成プランの作成が始まった。当時二〇〇〇万を数えた連邦空軍の総兵力を、四倍増しの八〇〇〇万に拡張する計画である。また、本来なら上程される予定がなかった、第二期と第三期合わせて一六万隻の建造計画も、レイフレム・ナイザル・ネレイド上院議員を中心に設置された上院外交委員会の強力な支持のもと、審議が開始された。

無論、上下院には、このような連邦空軍と連邦政府の動きに危惧を抱いた人物も少なくない。セリア恒星区の上院議員レイナー・クアシムは、難詰している。

「一方で外交交渉をすすめ、一方で戦争の準備を進めるのは二枚舌ではないのか」

“連邦史上最も剛毅な大統領”と呼ばれるリー・タウナーの回答は明快だった。

「次の戦争の準備をするのが、平時における軍隊の仕事である。彼らをコントロールし、暴走させないのが政治家の仕事である。暴走を恐れ、軍隊にがんじがらめの制約を課するのは、政治家が自らの自制力に自信を持たないことを証明するようなものだ」

タウナーは、自ら主宰する連邦外務委員会に、連邦空軍の首脳を招き、外交と軍事の乖離を避けようと試みてもいる。連邦空軍長官のラアム元帥、次長のカーツ大将、連邦空軍艦隊司令長官レムトフアアン中将、国防情報局長レンディッツ少将らの高級軍人が参加した、この委員会は、次期大統領のカーリッツ・レークシーによって解散させられるまで、連邦の外交と軍事を協調させる上で重要な機能を果たすことになるのである。

「あれまあ……」

とは、新任の外務大臣の名を、電送新聞に見いだしたマールクの嘆声である。

「あのダルマさんがねえ……」

“ダルマ”とは、植民相ジェリコウ・シユジュケイのあだ名である。政府与党の最長老として重きをなしているが、実際は無定見な政治屋に過ぎないことを、マールクたちはいやというほど思い知らされている。“ドレド戦役”の開戦を告げるドレドからの最後通牒を、“書式に合わない”と“却下”した逸話は、氷山の一角である。

「ひどい人事ですね」

艦隊演習から帰還してきたばかりのネイス・ミュツケルも、さすがに苦笑を隠せなかった。

「一〇年余り植民相の座にあり、共和国政府中、最も外交経験の豊富なミスタ・シユジュケイの手腕に期待する”んだそうだよ”

「シエルメスもたいへんだ……」

とはローナク。

「書式が一ミリで狂ったら、即座に“却下”だからなあ」

「書式さえ合つてれば、“あしたは流星雨です”と書いてあつたつて気が付きもしないだろうよ」

ペーパーを畳んで、マールクは一同に視線をめぐらした。ミュツケル、ローナク、ドレスン……“マールク艦隊の三将”……を初めとして、ファートウリック・ラング、セルティ・マックス、レイトウラント・シャブリ、そして最年少のメル・ヤンデキフィティらが、久々にドライバオム要塞に顔を揃えている。約二万三〇〇〇隻の艦艇と、一〇〇〇万の将兵を統率する、マールク艦隊の首脳たちであるが、いずれも若い。最年長のセルティ・マックスでさえ二九歳に過ぎず、最年少のヤンデキフィティに至っては二一歳でしかない。

「まさかないだろうけれどね……」
言いながらも、マールクは警戒を怠らなかつた。主力の七個艦隊の全てをドライバオムに集結させ、交替で“ル・フロント回廊宙域”のパトロールにあたらせる。“シュネーゼル事変”の勝利に乗じた、連邦空軍の侵攻作戦を警戒したのだが。

「結論から言いますと、連邦空軍は、艦隊をシュネーゼル……ヴィルワ恒星系と呼ばれているようですが……そのヴィルワから、艦隊を引き揚げたようです」

休暇後、最初の任務、シュネーゼルへの機密偵察を果たしたヤンデキフィティが報告する。眠つたような共和国で、マールク艦隊だけは活発な活動を怠っていない。

何でもないようであり、実際には危険な任務だった。“事変”が終結して、未だ三カ月。連邦空軍も警戒しているはずだった。ヤンデキフィティの艦隊が、連邦圏と共和国圏が接するシュネーゼルに侵入すれば、連邦空軍は問答無用で侵略行為と見做すだろうことは自明だった。

ヤンデキフィティは、非武装の電子情報収集艦ばかりを集め、自らもその一艦に乗り組むという大胆な計画を立て、そして成功させたのだ。

「詳細は報告書にあるとおりです。連邦空軍の主力艦隊は、シュネーゼルに駐留していません。第四番惑星の基地にも、物資が集積されている形跡はありません。ヴィルワに隣接する半径約五〇光年の宙域には、知的な生物の活動を示している恒星系がありません」

「……つまり、シュネーゼルが連邦の植民星であることは確実、ということですね」

確認するミュツケルに、ヤンデキフィティは確信を込めた頷きを返す。

「機密裏な戦略偵察では、メルがやれたこと以上にはやれないだろうね」

マールクも頷く。全艦隊司令官とその副司令官を召集してしまつと、ドライバオムは裸同然である……そう非難する声もないではないが、マールクも、彼の幕僚たちも気にとめなかつた。シュネーゼルが戦略基地化されていない。二〇〇〇光年余りを一気に突破して、共和国圏に侵入するためには、シュネーゼルの基地化が、連邦空軍にとっては必須である。それをしていないのだ。ならば、やたらに金と物資を食う艦隊出勤など取り止めても構わない。

「……とすれば、だ。戦略偵察、ということになるね」

「政略偵察……ですか？」

「そう。使節団を連邦へ送る必要がある。このまま、爪の先で連邦圏をひっかいていても、シエルメスが蟻なのか象なのか、さっぱり分からない。使節団について連邦の首都を見せてもらえば、はつきりするだろう」

「ビク・ロン 巨象だつたらどうします？」

「ローナクだつた。」

「シュネーゼルでの印象では、かなりでかそうだ。可能性あるでしょう？」

「巨象と喧嘩するのは愚かすぎる。共和国はいいとこ螻蛄さ。象と喧嘩して、勝てるものじゃない」

「しかし、自分たちを天下無敵のマンモス象だと勘違いしている人も多い」

ドレスンが、ローナクの言葉を引き継いだ。

「……考えることがあるんですがね、閣下。政府や参謀本部が、どうしても戦争をしたい、と思つたら、どうしたって戦争になるんじゃないですか？」

「ベイ……」

「七年以上もつきあいました。いい加減にしてほしいんです」

「ベイ……もういいでしょう」

「ネイはいいのか、また何年も戦争をさせられるかもしれないのだぞ」

「いいとは言いません。ただし、今は連邦に関する情報を得るのが先決です。十分な情報を得た結果、連邦とは戦えないと分かっただとして……かつ、政府が開戦を強要するとして、その時は閣下の判断に期待したいのです」

「言ってくれるね、ネイ」

「期待させては頂けませんか、閣下？」

「できれば、期待に応えたいがね」

さて……と、マールクは話題を変える。連邦と連邦空軍の壮大な活動には比較するべくもないが、マールクはマールクなりに対連邦戦略を用意している。「マールク提督にしては珍しいことに……とローナクが評したのだが……、渋る国防省と軍需省を説得して“ル・ラント回廊”に設置する補給線の予算を獲得した。シュネーゼルに至る六〇〇光年の宙域に、野戦要塞、宇宙トーチカ群、中継補給基地など約一〇〇箇所を設置する計画である。予算が下りると、マールクはシャブリに命じて工事を開始させた。

マールクは、また、艦隊拡張計画にも手をつけている。“ドレド戦役”中に議会を通過し、そのまま実行段階に入っている艦隊拡張計画に強引な注文をつけたのだ。

「また“オペレーション・コクローチ”だよ」

マールクは言う。新しく建造される艦艇の兵器体系規格を、連邦空軍のそれに一致させるといふマールクの要求は、艦政本部を啞然とさせた。マールクは、繰り返し“ドレド戦役”での“オペレーション・コクローチ”……敵の補給物資を奪って、艦隊の補

給に充てる……の有効性を説いて、要求を通すことに成功したのだ。

更に、この時期、マールクは、彼の数少ない著作の一つである“ドレド戦役の回想”の執筆を始めている。マールクの言行は、特にアリシア・ミュッケルの手によって、かなり詳細に後世に伝えられている。しかし、本人が書き遺したもので出版されたものとしては、“ドレド戦役の回想(正・続)”のほかは、僅かな覚え書きがあるだけである。

「常勝提督のエッセイ、ということ結構、話題を呼ぶと思うんですよ」

勧めたのはアリシアだった。

「シエルメスとの戦争が無謀であることを、さりげなく訴えて頂きたいんです。提督の著作だったら、そう簡単には発売禁止にもできませんしね。読んだ人が、すぐにわたしの主張することを支持してくれるようになる……そんな甘い見通しは持っていません。ただ、実際にシエルメスとの戦争の危険が迫っていたときに、何人かは無意識に判断の参考にするんじゃないかしら……そんな風に思うんです」

「まあ、やってみます。期待はしないでください」

「ええ、締切なんてやばなことは言いませんから」

アリシアは微笑って、マールクをからかった。守る気もない人に、締め切りを押しつけても無意味なことは知っていますから……と。いずれにしても情報が必要だった。軍事的に戦略を考えるにしても、対シエルメス戦の無謀さを説くにしても。

「やるだけのことはやっておこう。シエルメスとの戦争は、共和国にとって最悪の選択だが、万々に備えないわけにはいかない。それに……」

のんびりした口調で、マールクは続ける。

「なににも、最悪のケースばかり考えなきやいけないってわけでもないんだ。シエルメスがあつさりとしユネーゼルを譲ってくれるということだつて、ありえないことじゃないんだからね」

「マールクとマールク艦隊は活発に動き続けていたが、ル・ラント共和国政府の動きは、余りにも緩慢だった。」

「ピセンテ・フェレラ首相は外務省の設置を決めたが、事志と異なり、外務相の人事は派閥レベルの取引で終始した。シユジュケイの無能さを、フェレラはよく心得ていたから、彼を外相に任命するのは不本意極まりないことであつた。」

「せめて補佐役の次官に人を得たい、と望んだフェレラの希望も、植民省を初めとする官僚の厚い壁に阻まれた。これも不本意なままに、植民省の官僚であるグロースヌイ・プロトボルノフを外務次官に補さねばならなかつたのである。プロトボルノフが、シユジュケイの忠実な部下であることは周知の事実だつた。」

「連邦政府の派遣した外交使節団代表……駐ル・ラント連邦大使に、間もなく昇格……フェルトリック・キヤスパーは、割り当てられたオフィスを足場に活動を開始していた。テリー・リヴァーアズをアシスタントに、共和国公用語の習得に励む一方、毎日のように、新設された共和国外務省に出向き、連邦首都への代表団派遣を求め続けたのである。リー・タウナーは、フェルトリック・キヤスパーの共和国母星派遣と並行して、共和国政府外交団の連邦首都への迎え入れを要求していたのである。」

「しかし、フェレラの八方、手を尽くした説得にもかかわらず、シユジュケイは冷淡に連邦への派遣を拒絶し、プロトボルノフもさまざま理由を示して連邦首都への派遣を拒んだ。」

「共和国に、誠意、見られない！」
激昂することは、さすがになかつたものの、キヤスパーは習得しかけの共和国公用語でシユジュケイに迫つたことがあつた。

「連邦、共和国の侵略行為、非難しない。連邦、わたしを派遣した。平和交渉が目的である。大統領、使節派遣、求める。共和国、応じない。これ、外交的非礼」

「そう言われてもなあ……」
散々要求されて、ようやく会見に応じたシユジュケイの反応は鈍かつた。

「コーウィンでの侵略行為を詫びてもらわんとなあ……」

「詫びる？ 詫びるのは、共和国だ」

「共和国の艦隊を攻撃したのは、連邦空軍です。コーウインを発見したのは、共和国ですから、そこで共和国の艦隊を攻撃した連邦空軍は、侵略者だと、理解しています」

「何ですと？」

「償金の計算は、今、させているところです。いずれ、要求しますから、支払つてくだされば宜しい」

「キヤスパーは啞然とした。」

「共和国、本気で連邦と交渉するつもり、あるのか？」

「だから、交渉をしています。ここで、こうやって。他に何を要求されるといふのですか。共和国は、寛大にもあなたの方にオフィスまで提供したし、滞在のための費用もそれなりに負担している。まあ、負担した分は、いずれ返してもらつても。わたしも、こつやつて時間を割いているんですしな」

「大統領、外交団の派遣、要求している」

「考えときましよう。返事は、いずれ、ということだ」

「キヤスパーは怒り狂つてもよかつた。彼が短気であれば、“交渉の見込みなし。連邦空軍は、ただちにシユネーゼルの報復を準備されたし”とでも打電していたことだろつ。」

「そうなつていれば、勝ち目はなかつた……」
とはマールクの回想である。連邦空軍がシユネーゼルを戦略基

地化し、飛び石伝いに「ル・ラント回廊宙域」を侵攻する作戦を、七十七年の時期に開始していれば、マールクには勝算が立たなかったのである。

「ル・ラントの報復に備えて、シュネーゼルの防備を強化する必要はないのか？」

連邦での声が無であったわけではない。シュネーゼルの改造と開拓にあたったデュレーン恒星区は、繰り返し、シュネーゼルの要塞化と同恒星区への制式艦隊駐留を要求し続けたものである。「この要求は妥当なものと考えるが？」

タウンナー大統領も同意を示したのだが、反対したのが新設したばかりの参謀本部対ル・ラント部であったのは皮肉である。第二艦隊に移ったレーフラム・ネレイドも意見書を出し、ヴィルフ恒星系第六番惑星ヘルムの衛星リュウインへの基地建設と、艦隊駐留を具申しているが、大統領には届かなかった。結局、シュネーゼルへの制式艦隊駐留は、二つの理由から大統領の同意を得るには至らなかったのである。

連邦上下院で高くなり始めた「ル・ラントとの和平には、シュネーゼルの非武装化が必須」なる意見であり、更には、シュレフ・コングロマリットがデュレーン自治政府にかけた圧力である。シュネーゼル開拓に多額の投資を行ってきたシュレフ・コングロマリットは、「シュネーゼルの基地化は、投資した資本の回収を絶望的に遅延せしめる」と主張した。「もし、デュレーン恒星区政府にして、シュネーゼルを連邦空軍に譲渡するがごとき主張を堅持するならば、シュレフ・コングロマリットは、同恒星区における一切の経済活動の方針を再考する必要に迫られたと考えるだろう」。まだ未成熟な辺境の恒星区であるデュレーンには、シュレフ・コングロマリットの投資は必須だったから、制式艦隊配備を要求する声はトーンダウンせざるを得なかった。

キャスパーは、しかし、シュジュケイの態度を「軍事力に自信あるがゆえの余裕」と受け取った。マールクが慎重に配慮した結果、キャスパー達は共和国の軍事力に関する情報を封鎖されていた。共和国の一般市民の生活が窮乏し、物資が不足していることは自明だったが、キャスパーはそれを、「軍事国家ゆえの一般消費物資の不足」と受け取ったのである。

連邦母星に派遣してもらいたい……風変わりな自薦者が、一〇名の外務次官補の中から現れたのは一〇月に入ってからである。

小柄な体躯に、不釣り合いなほど立派な口髭を蓄えた小男で、名をカシニー・ローゼンと言つた。元植民省の若手官僚の一人であり、ドレド駐在弁務官として優れた実績を持っていたが、シュジュケイからのうけが悪く、次官に昇格できる望みは皆無に近い。

「まあ、チャンスを下さい、ということですよ」

動機を問うたフェレラに、もっともらしく口髭をひねったローゼンはにたりと笑つてみせたものである。

「外務官僚になった以上は、よその国を見てきたいものですからね」

「連邦との関係が成立すれば、きみの知識が重要視されるようになる……そういう計算もあるのでしょうか？」

「ありますとも。情報や知識は力ですからね。この先、わたしは冷や飯しかあてがわれそうにありません。シエルメスへ行くことで、わたしの失うものは皆無ですよ」

「宜しい、あなたの自薦を認めましょう。連邦首都へ行ってください……次官殿を丸め込むのは大変だろうが、まあ、なんとかがつてみるといいでしょう」

結果として、ローゼンはプロトボルノフ次官の説得に成功する。七十七年二月一日、プロトボルノフを筆頭とした四〇名の外交使節団は共和国母星を出発する。ヤンデキフィティ艦隊が彼らの

護衛を務め、シュネーゼルで連邦空軍の第四艦隊に引き渡した。彼らが連邦首都であるシエルメス・コーネットに到着したのは、七十七年も押しつまった、一月三日。連邦暦では、五六七年七月一五日のことだった。

この時の共和国外交団の半数を占めた駐在武官の名簿に、“メルビン・シュレーダー”なる名前がある。名簿に添えられた、灰色の髪と鉄色の目をした若い少将の写真が、連邦の注意をひくことはなかった。

無論、同じ駐在武官簿に連ねられた、“ニカロノフ・エフゲニー”の名も、“その他大勢”で処理されただけだった。

共和国暦七十八年の一月、大方の予想を裏切って、アリシア・ミツケルは上院議員に選出された。二二歳、下院議員を一期つとめたあとの当選は、共和国を驚かせるに足りた。共和国の上院議員は、下院議員よりも大きな権限を与えられている。公然と“シエルメスとの平和共存、惑星コーウインの平和裏の譲渡交渉を”と訴えた彼女に、共和国政府と宇宙軍参謀本部はにわかには警戒の色を強めたのである。

当然のように、各種の“政治団体”がアリシアを攻撃した。彼女の運動員の活動を、“愛国連合”なる団体が妨害することも一ならず起きたし、アリシアの街頭演説も、しばしば警官たちに中断させられた。しかし、ふたを開けてみれば、アリシアの得票は対立候補を大きく引き離していたのである。

「……という事情なわけだ」

選挙後、まもない一月半ば、デュラン・バードフェザー少佐は、ユーレイ・ザモフ少将……参謀本部第五局長……に呼び出されている。

「実にまずいやり方をしたものではないかね、バードフェザー少佐。ミツケル議員は正論をのべている。正論は正論をもって撃ち破らねばならない。“愛国連合”などという道化者や警察力にたよってどうこうできるものではない」

「それは分かります」

「愛国連合」に関するきみのレポートは読ませてもらった。とんだ道化者たちだが、一概に無視もできない」

七一年の“学徒動員法”を仕上げとして、共和国宇宙軍は徹底した徴兵システムを布いているが、徴兵システムが完全に公正に運用されたという例は歴史上に存在しない。共和国宇宙軍のそれも、歴史上の例に漏れなかった。というより、最も不正に運用されたシステムの一つだったとも言われる。

ザモフの指示を受けたデュランは、“愛国連合”なる過激な主義団体のメンバが、巧妙に徴兵システムの網を逃れた者たちであることを探り出していた。

大学の研究員になれば、軍隊勤務を免除される。当然の結果として、共和国の大学の研究室は、有力者の指定で溢れ返った。ところが、削減に削減を重ねられて瘦せ細った文教予算は、需要に応じられるに十分なほどの研究員の定員を大学におけなくなっていた。

政府の正式な許可を得た政治団体の幹部も、徴兵を猶予されるという条項が利用されることになった。一人の議員もメンバに持たないにもかかわらず、“愛国連合”は正式の政治団体として認可されている。試みに加入を申し入れたデュランを、“愛国連合”はすげなく拒否した。彼が使った経歴は擬装されたものだったが、その中に有力者との繋がりを示すものはなにもなかった。

「……別の“伝説”^{カッター}を使って接近したら、今度は熱心に加入を勧められた、ということだな」

肩を竦めるザモフに、デュランはわずかに首肯を示した。彼が二度目に使った擬装経歴には、有力な議員や軍需産業の幹部たちとのコネクションが無数に示されていた。

「まあ、だからミュッケル議員の正論が通るわけだ。まして、内々でフェレラ首相がミュッケル議員を支援しているふしがあるし、シエルメス連邦も平和攻勢をかけてきている。暴力で抑えようとすれば、暴力に頼った側の非がクローズ・アップされるだけのことだからな」

「フェレラ首相がミュッケル議員を支援している、というのは？」
「確証はないがね。それで、だ。きみには半年ばかり連邦母星へ行ってきたもらいなのだ」

「連邦母星へ、ですか？」
デュランは驚いた。

「連邦の宇宙軍……連邦空軍と呼ばれているらしいが、その連邦空軍の兵器体系を理解できる駐在武官が必要になっている」

「連邦空軍の兵器体系……ですか？」

「そうだ。これは、マールク艦隊からの要求でもある。万一の場合は、連邦空軍の軍需物資を奪って補給に替えなければならぬ。とね。ただし、我々としては疑わずにはいられないのだ」

「疑う？」
「そうだ」

「何を、です？」

「マールク艦隊幕僚の、共和国に対する忠誠心をだよ」

ザモフは指摘する。確かに、“次の戦争を準備する”のが艦隊指揮官としての義務に違いない。しかし、連邦が外交交渉を要求し、共和国もそれに応じる動きを示している今、連邦母星へ軍事スパイを送り込めと要求するマールク元帥の意向は大いに疑わしい。一つをまちがえば、連邦と共和国の外交交渉は破綻し、全面戦争

に突入しないと限らないではないか。

「マールク元帥と、彼の幕僚たちは十分に報われているとは言えない。確かに高い階級を与えられ、無数の勲章が授与された。しかし、共和国宇宙軍中央での発言権は低いし、政治的な権限も大して与えられているわけじゃあない」

三〇歳にもならないうちに宇宙軍での階級をきわめてしまった軍事的天才が、次に求めるとすれば、それは政治的な権力かもしれないではないか。

「わたしが危惧するのはだ、マールク艦隊と連邦空軍とが独自に結びつくことだ。別に、共和国母星である必要はないのではないかね」

「つまり、コーウィンであるとか……」
「その通りだ」

共和国母星は共和国政府に委ね、コーウィンから外側の宙域を領土とする“新共和国”の建設を、マールクが狙っているのではないか……外宇宙への進出を、マールクは公式の席でもしばしば口にしていたし、だからこそ“ドレド戦役”の最中にも、探査船を「ル・ラント回廊宙域」沿いに派遣し続けていたのではないか。

「……マールク提督が、すでに連邦母星に部下を送り込んでいる可能性もある。連邦空軍の装備を調査するとともに、彼らを監視してもらいたい。さしあたり半年だ」

コーティのことを、デュランはちらと脳裏に思い浮かべた。ヤンデキフィティという名の若い提督に紹介されてから約半年、コーティはアリア・ミュッケル議員のメッセンジャーのアルバイトを続けている。結構、信頼されているらしく、アリアはマールク艦隊の動きに関する情報を、雑談に交えてコーティに話したりするようだった。

「結構、面白いんだ……」

夕食時などコーティはデュランに語って聞かせたりする。

「ええと、ロー……ローナク提督だっけ、そのローナク提督とマールク提督の話なんて、もう傑作。掛け合い漫才だよ」

無力化されたドレドを不必要に空襲して妻を奪った張本人として、デュラン自身は、マールク艦隊の幹部たちを嫌っている。コーティが、マールク艦隊の高級士官たちに好意を抱き始めているのにはいい顔をできなかった。

「まったく、緊張感のない連中だな」

マールク艦隊の艦隊司令官たちが、軍人的な規範からすれば、悪童どもの集団にしか見えないのは事実である。比較的、年長者のセルティ・マックスや、学究肌のファートウリック・ラングを除けば、マールクにしてもローナク、ドレスンらにしても紳士と言われるにはほど遠い。物静かな青年として知られるネイス・ミュッケルにしても、“勇将”ローナクと五分の殴り合いを演じたことがあるのだ。

だからこそ、コーティが興味を示し、好意を抱いたのだと言えないこともないが。

半年ばかり出張しなければならぬ……そう言う父に、コーティは非好意的な視線を注ぎ込んだ。

「どこ？」

「任務だからな、家族にも言えない」

「連邦母星でしょ、違う？」

ずばり言い切られて、デュランは絶句する。鼻の頭にしわを寄せて、コーティは言う。共和国の母星に半年も出張するところはない。ドレドは廃墟。

「……最近はやりだものね。シエ……シユルメス？」

記憶力の悪いコーティではないが、なぜか名前を覚えるのがひどく苦手だった。人名を山のように覚えなければならない歴史学

に早々に見切りをつけて、数学と工学、エア・バイクに興味と時間の全てを注ぎ込んだのは正しい選択だった。

「シユルメス」

「山勘だけだね」

デュランは否定も肯定もしない。食事を口に運ぶ手を休め、コーティは、今度は眉の間にしわを寄せた。表情の動きが速い。

「パパって、マールク提督たちの話になると、不機嫌になるね」

「当たり前だ。ドレドを灼いて、ママを殺したのは、マールクたちだ」

「そうかなあ？」

一度、アロシアに尋いてみたことがある。美しい上院議員は、眉をひそめただけで応えてくれなかった。こみいった事情があるのかもしれないが、もしマールクたちが、ドレド空襲に責任がないのなら、そう主張した方がいいのではないか。そうしないと、デュランのように家族を死なせた人々が、いつまでもマールクたちを恨み続けることになるだろうに……

連邦の派遣したフェルトリック・キャスパーとそのスタッフに比べて、共和国側の使節団の活動は不活発なものだった。連邦公用語の習得に意欲を見せたのは、主席書記官であるカシー・ローゼンだけであり、他のスタッフは連邦政府との交渉にも、情報の収集にも何の関心も示そうとはしなかった。

ひとり、連邦政府との交渉に関心を示し、しきりに接触を求め、主席書記官を、連邦政府側の人間は、“口髭の男”、あるいは“髭大使”なるあだ名で呼ぶようになった。悪意に基づくニック・ネームではない。

共和国母星に派遣したキャスパーからも、共和国が連邦との外交に熱意を示していないことが報告されてきている。武力の行使をためらわない点で、シユルメス連邦の好戦性は、共和国のそれ

を上回る。しかし、無原則ではなかった。銀河の隣人ともいうべきル・ラント共和国に、連邦政府と市民は一定の関心と、無条件でこそないがある程度の好意を抱いていた。その意味で、連邦政府は、ローゼンを共和国との外交の貴重な切り口と見做していたのである。

ローゼンはローゼンで、連邦圏の巨大さに感嘆せざるを得なかった。ヴィルワ恒星系の外縁でヤンデキフィティ艦隊から別れてから約三〇日にして、ようやく連邦母星へ入ったのである。無論、ヴィルワからの航路が直線を描いているわけはなかったが、それでも連邦圏の奥行きが、共和国圏のそのの数倍に達することは疑い得なかった。奥行きが数倍であれば、当然、幅も数倍に達するものと考えていい。

共和国の代表団に対して、連邦政府が無条件に好意的であったわけではないが、彼らが各種の情報を収集するのを、それほど厳しく規制することはなかった。連邦の基本的な国力を知るのに、高度の軍事機密に接触する必要はない。大学、場合によってはハイ・スクールのテキストで十分だった。連邦空軍の主要な艦艇は、安価な軍事雑誌にいくらかでも紹介されていたし、連邦圏のかなり詳細な航宙図ですら、ありきたりのブック・センタで入手できたのである。

無論、せつせと情報収集にあたっていたのは、ローゼンを除けば、駐在武官のひとりであるメルビン・シュレーダー少将だけだったのだが。

「昔の戦闘で目をやられておりまして……」

そう称して、シュレーダーはつねに色の濃いサン・グラスを着用している。遮光フィルターの故障で目をやられる事故は、連邦空軍でも少なくない。公式の席上でさえ、サン・グラスをかけた軍人の姿は、さして目立たなかった。

「……これは、しかし、たいへんな巨大国家だな……」

着任して半年も経たないうちに、シュレーダーは実感する。一九の自治恒星区と、幾つかの植民恒星区、開発途上の辺境恒星区などから構成されるのだが、ひとつの自治恒星区ですら共和国圏の容積を優に超えるものがすくなくないのだ。有人惑星の正確な数は発表されていないが、一〇〇前後を数えるのは確実だった。

シエルメス連邦の総人口は約三〇〇億。共和国の約八〇億に比べて圧倒的に多いとは言えない。しかし、共和国に数百倍する領域を抱えた連邦は、数千億の人口すら優に養い得ることだろう。連邦母星ひとつでさえ、鉱工業生産の能力は、共和国全体を数倍するものと思われた。

惑星改造技術も、シュレーダーを驚かせた連邦の最先端技術だった。遺伝子工学、電子工学、電子重力子工学、重力子工学などを複雑に組み合わせた惑星工学なる技術が、すでに数十年以上も前から開発され、不毛の惑星をシエルメス型の豊かな惑星に改造しているというのだ。

「簡単ではありません」

連邦総合大学の研究者の一人は、惑星イアス上の研究室を訪れたシュレーダーの質問に、そう答えた。

「改造に適する惑星、あるいは衛星は、直径にして一万キロメートルから約二万キロメートルまでです。このような惑星が発見される確率は、恒星系一〇〇に対して一前後です。これらの惑星が、改造可能な大気を維持している可能性は、更に下って二、三〇パーセント。あとは、経済学の問題になります。改造して植民を行ったとして、ペイするのは更にその三分の一程度なのです。つまり、恒星系一〇〇〇箇所にたいして、有人惑星一つを生み出すのが、現在の技術の限界です」

それでも十分だ、とシュレーダーは思った。共和国圏にも数万

の恒星系があり、改造可能な惑星は一〇箇所を超えるはずだった。
「大気の改造は特殊な藍藻類を使用します」
シュレーダーの感想もどこやら、解説は続いた。

「原始惑星の大気組成次第ですが、藍藻類を投入するまえに、重力制御システムを衛星軌道の上に設置し、火山活動を極度に活性化させることもあります。地殻内の水分を大気内に放出させ、海を作らせるわけですが、この段階で約一〇年、時には一五年を必要とします……氷結した外惑星衛星がある場合、これを大気圏に突入させて一挙に水圏を構成させることもありますが、まだ技術的には完全といえない段階にあります。落とし方を間違えると、膨大な爆煙があがり、いわゆる“核の冬”に似た現象を引き起こしてしまいますから」

「気の長い……」

「は？……ああ、なるほど、気長な作業だと言われるわけですね。そうですね。確かに気の長い作業です。大気の改造が終わると、やはり重力制御システムを、今度は地殻に埋め込んで、地殻の状態を安定させ、理想的な海陸比を作り出します。並行して、動植物の移植が進められ、改造開始後、平均して約一五年、長い場合でも三〇年で入植可能となるわけです」

「シュネーゼルも、そうだったのかな？」

「シュネーゼル？ シュネーゼルは、いささか例外でした……」
大気組成が、比較的、連邦母星に近かったため、改造は一〇年という異例の早さで完了したのだという。それでも改造にかかられた費用は数百億連邦通貨に達した。

「数百億UD？」

連邦通貨と共和国通貨の換算率はまだ定められていないが、シュレーダーの見るところでは一UD（連邦通貨）が四〇五RC（共和国通貨）に相当しそうだった。無論、流通する商品の質と

量で、ル・フント共和国はシエルメス連邦の敵ではなかったが。
「……だとしても、二、三〇〇〇億RCで惑星一つ、手に入るといふことか」

“ドレド戦役”の戦費は一〇兆RCを優に上回った。シエルメスは、ドレドとは比較にならない巨大国家である。その連邦との全面戦争は、文字どおりに共和国の経済を破滅させるだろう。

「戦争とは、大義と正義のために行われる崇高な行為である。シエルメスとの開戦は、宇宙の大義に基づく正義の戦いであり、共和国に課せられた神聖な義務である。人命や金銭を言い立てて、大義と正義を無視する者は、共和国の正しい市民とは言えない。そう言い切つて差し支えないであろう」

軍需相のクラウゲル・ブラウエンの演説を、シュレーダーは苦々しく思い出した。数千億RCで買い取れる惑星を、数百兆RCの費用と数千万以上の死傷者を出して奪い取るうとなどと主張する。一部の軍人や政治家の気が知れない、というものではないか。しかも、連邦相手に戦争に勝てるという保証は全くないのだ。

低調だったとはいえ、連邦のフェルトリック・キャスパール、共和国のカシニー・ローゼンの努力は僅かずつではあるが報われ始めた。

連邦暦五六八年一月一日（共和国暦七一八年七月一六日）、連邦大統領リー・タウナーは共和国首相ピセンテ・フェレラ宛てのメッセージを送り、両国の共存共栄を訴えた。

「ともに銀河をホームとする我が敬愛する隣人に、挨拶をおくる。連邦は、その創立より五六八年目を迎えた。聞くところによれば、共和国もすでに関するところ七〇〇年の余に達することのこと。

我々の邂逅は、不幸な形で行われた。しかし、邂逅の形式の不幸さが、両国和平を妨げるものであつてはならないと信ずるものである」

フェレラは、閣議での猛烈な反対を押し切って返書を送った。『共和国は、連邦との紛争を全く望まない。共和国は、“シユネーゼル事変”における共和国宇宙軍の非礼を謝罪する。連邦が、我々の謝罪を受容し、かつ銀河における隣人としての好意を示してくれることを期待することを望んでやまない』

“連邦のコーウィン侵略事件”を、共和国宇宙軍の非礼として謝罪するとは何事か……怒り狂うブラウエン軍需相を、フェレラはあっさりと更迭した。当然、ブラウエンをバックアップし、宇宙軍からの軍需物資調達を一手に引き受けてきた軍需産業は、“首相横暴”を大合唱する。

フェレラは、軍需産業に対しても痛烈な反撃を加え始めた。宇宙軍艦艇の装甲に使う超合金、ワープ用の超空間航行機関、超融合核反応による動力炉などの、主要軍需産業への発注を全面停止し、これらのグループに属さない中小メーカーへ切り替えたのだ。圧力を受けて青ざめる軍需産業グループの一部の幹部と、フェレラは接触し、ブラウエンへの支援をやめ、対連邦開戦のキャンペーンをトーンダウンするのなら発注を再開してもよいと伝えた。フェレラは成功し、これまで一枚岩の結束を誇っていた軍需産業グループを分裂させたのである。

フェレラの圧力は、参謀本部にも及んだ。ドロク総長、ワシエック次官の体制こそ崩されなかったものの、編成途中にあった全ての艦隊から、参謀本部の派遣した参謀将校が引き上げさせられた。ドロクは猛烈に反対したが、七一九年度から参謀本部の機密費が大幅に削減され、しかも使途の公開が義務づけられることになったのである。

「フェレラ首相は発狂した。彼は、シエルメス連邦の手先となって共和国を滅亡の淵に追いやるうとしている」

これまで、共和国のマス・ジャーナリズムは、“シエルメス連邦

は銀河を支配する暴虐な軍事帝国”であり、“シエルメス帝国を打倒して、銀河に平和と安定をもたらす”のが“共和国と共和国市民の神聖な義務”だとしてキャンペーンを繰り広げていた。

「子供向けのアクシヨン・ドラマでも、もう少し、ましなシナリオを使っんじゃありませんか？」

呆れて批評したのがネイス・ミュッケルであり、応じたのはマルクだった。

「なに、単純な勧善懲悪の方が受けやすいのさ。マンネリかもしれないが、繰り返し使われるからマンネリになる……昔、読んだ小説のせりふにそんなのがあったよ。有効だから繰り返し使われる。繰り返し、使われるからこそマンネリにもなる……ってね」

主要なジャーナリズムは声を揃えてフェレラのやり方を批判し始めたが、間もなく沈黙を強いられることになる。七一九年末に、共和国の主要ファクシミリ・ペーパーが一齐に購読料を値上げしたことに對して、フェレラは“消費物資の価格安定に関する緊急措置”を発動したのである。この法律は、“ドレド戦役”に伴う軍需物資調達のために制定されたもので、戦役後も参謀本部の根強い反対で廃止されなかった。フェレラは、逆手にとったのである。この法律が戦時法であり、裁判は二審制非公開の軍事法廷で行われる、と聞かされたジャーナリズムの、“反政府キャンペーン”は一気にトーンダウンした。

こうして七一九年末までに、ピセンテ・フェレラは、共和国で最も強力な反シエルメス勢力……軍需産業、参謀本部、およびマス・ジャーナリズム……の制圧にひとまず成功していたのである。

「共和国暦七一九年は、ル・ラント共和国にとって新たな展望を予感させる一年だった。昨年、我々は畏怖すべき隣人、シエルメス連邦と邂逅した。シエルメス連邦は、強大な武力と巨大な国力を持った巨人である。連邦は、敵に回した時には恐るべき隣人

である。しかし、彼らと共存することを恐れ、安易な解決に走ってはならない。ここに、わたしは市民諸君に敢えて訴える。我々が恐れねばならないのは、恐れることそのものである」

七十八年の二月三日、フェレラは異例の声明を発して、連邦との平和共存への意思をはっきりと示した。

そして七十九年。新年を、マールクはミュッケル姉弟とともに迎えている。既に両親の亡いマールクにとつて、ミュッケル姉弟は、共に休日を通すには最も心休まる友人たちだった。

「しかし、危ないですね」
アリシアに向かって、マールクは危惧を表明する。

「危ない？」

「そう、危ない……」

フェレラ首相の声明を扱った何種類かの電送新聞を、マールクは漠然と指差した。

「フェレラ首相は、ちよつと焦りすぎじゃないかな。怒ってるでしょう、抑えられた連中は……」

「ええ、怒っているようですよ」

今のところ、フェレラにしたかにしてやられた軍需産業グループにしても、参謀本部、マス・ジャーナリズム、いずれもが沈黙を守っている。マールクには、その沈黙が不気味に思われた。

「彼らが反撃に出てくる前に、一気に連邦と結びたい……フェレラ首相としては、そういう心積もりなんですよ。今年半ばをメドにして、連邦と中立条約を結び、シュネーゼルの購入を打診するつもりだ、と、そんな噂も飛んでいます。共和国政府の手で買い取ってしまえば、マールク元帥が勝手にシュネーゼルを共和国から分離独立させようとしても簡単にはできなくなる……と」

「まあ、それがフェレラ首相のシナリオというのなら、別に異論はないけれどね」

マールクは困ったように髪をかき回す。彼に外宇宙への憧れを植え付けたのは、寧ろミュッケル姉弟だった。外宇宙進出の希望を、公式の席で不用意に口にしたのは確かにマールクのミスに違いない。

それまで黙って、マールクと姉のやりとりを眺めていたネイが口を挟む。

「要するにマールク艦隊を牽制するためにも、シュネーゼルを早く手に入れなければいけない……そう宣伝するのが狙いですね、姉さん。そうすれば、閣下への反感から、シュネーゼルに関する交渉開始への抵抗が薄れる……」

「そういうことよ。政治というのも色々面倒臭いわね」
「面倒臭いだけならいいんだけど……」

ネイが肩を竦めるくせは、逆にマールクからうつされたものらしい。フェレラ首相の声明を報じる記事と並んで、姉アリシアに対する中傷記事を見いだして、形のいい眉を曇らせる。アリシアは、弟の表情の変化と、視線の先に気が付いたようだった。

「ああ、それ？」

アリシアが、僅か一期の下院議員の任期を経ただけで上院議員に選出されたことを、「国政選挙を、人気投票と同じレベルで考えるような風潮が広まるのは、共和国の次代のために、まったく憂えるべきことではないだろうか」と批判している。その上で、アリシアがある有力な上院議員と「特別な関係」にあるのではないかと、お決まりの「ある筋によると……」なるフレーズでしめくくった中傷記事である。今度は、アリシアが肩を竦める番だった。アリシアの美貌は、よきにつけあしきにつけ注目を集めてしまうのだ。

「困ったものね。最近、メジャー・ペーパーでも“ある筋による……”ですもの。昔なら赤新聞しかやらなかったことなのにね。」

あとは“論議を呼ぶことは必至である”と“なりゆきが注目される”……”

上院議員に当選して一年目、アリシアは上院に新設された外交委員会のメンバに選出されていた。新人議員とて、発言の機会は多くはなかった。が、シエルメスとの外交に消極的な他の議員の中で、連邦との和平に積極的な彼女の姿勢は目立つものだった。同時に、彼女は上下院を通じて設けられた司法特別委員会……通称レラン委員会……にも参加し、特に麻薬密売組織の摘発に力を注いでいた。“ドレド戦役”後、ル・ヨント社会での各種麻薬の蔓延は深刻な問題となっていたのである。

この委員会が、七一年の六月に軍需産業グループの有力なメンバであるスターザット・ケミカル、それにスターザットと繋がりのある有力な上下院議員四人、それに参謀本部の将校数人が、最も悪質な合成麻薬の密売にかかわっていることを突き止め、周囲の猛烈な反対を押しつけて起訴に持ち込んだのは、半ば以上アリシアの功績と言ってもよかった。共和国宇宙軍の下級兵士に蔓延する麻薬中毒に手を焼いたネイとベイ・ドレンスが、根気よく密売ルートを追いつけて、アリシアに逐一、通報していたのである。そして、アリシアは、レラン委員会の他のメンバからの妨害や反対をおして、強引なまでに調査を進行させた。“六月事件”として知られる出来事である。

アリシアを敵視する立場からは、彼女がますます煙たい存在になりつつある、と言ってもよかった。彼女に対する、マス・メディアの中傷攻撃が、急に頻度を増したのは、まさにこの六月事件以降のことだった。無論、一方で反麻薬キャンペーンの怠りない、共和国のマス・メディアであるが……事実、あらゆるメディアがキャッチフレーズを連呼していた。“あなたには、ノーという権利があります”……と。しかし、戦役中に麻薬に冒され、廃人同様

になった多くの下級兵士の存在がある。彼らへの救済は、政府レベルでも民間レベルでも論議されたことすらなかったのだけれども……。